

眠る傍ら



風詩

-2-

つたの 菜

涙が癒すは...

『悲しい頬に 流るるは...
はるか昔の
母の なぐさめ』



...涙と海の水の成分が同じという説から...

夢抱く灯火

憧れへと伸ばす 想い

あまりにも遠くて 悲しくなって

目を背けても 胸の埋け火は消えない

消そうとも想えず 憧れを灯したまま

だんだんと 少しずつ...歩く

きっと

なれなくても

私は悔しく泣きながら

灯し続けた火にあたたまれるのだと

そう 想う

そう 願う

きみの好きが消えかけたように想えて

勇気を出して 手を離そうとしたら

手を繋いでいようって 言って くれた。

...ありがとう。

これからは

もっと

きみに

もっと 優しくできる.....。

sentimental

さわやかな風にも 染まりきれない

こんな日も あり

嘘つきな星々

小さな星々が光る

切れ目の無い闇の中で

照りかえす若さと

自ら燃えゆる業火

終焉を迎えた 断末魔が

交差する 軌道する 混在する

彼の星々の正体を知りながら

敢（あえ）て騙される

飛散する煌きを 誇らしく眺めながら

願いさえもする

幸せの 為に

ひととき

細（ささ）やかな月の唄に 耳を寄せる

高い夜空より 瞬く星々よりも

鮮やかな情景が 瞳を潤おす

こんな憂いた時間が 心の大きな糧となるのだと

見えるものだけを信じるあなたにも 伝えたい

種

何になるとも知らず

眠る

大地温まれば やがて割れ

芽吹く

太陽に愛でられ

雲の涙に打たれ

月の溜息に吹かれ

何の為とも知らず

育つ

本能に従い

伸びゆく

常に

光に向かって

ミルクティー

アッサムの紅い茶葉

ミルクといっしょに立ち昇ったら

ほんわり豊かな紅茶の香り

甘いお砂糖が ほのかな芳香をからめて

あたたかな まま

からだの 深く 深くへ

染み透る

ゆきわたる

揺らぐ香りの憩い

胸中の 至福

眠りの窓

囚われた 夜の裾(すそ)

顔をあげると 鎧を脱がされる

冷えた感覚 虚ろな空気に

浅い眠りを 剥ぎ取られる。

遅い夜明け 白い空

鳥の声 車の排気音

誰かが 生きる

巡り来る 時間

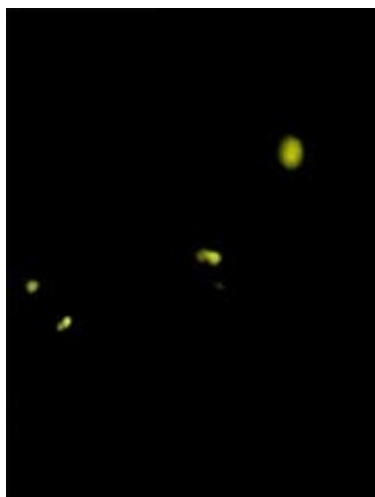
朝陽は 眠りをも包む

瞼の下にも光を送る

悪夢を観ても きっと

夜よりは 優しい...

ふうわりと 冴えては潜む 夏翠



日記～おもいでつづり

ずいぶん剥がれ落ちた
わだかまっていた 苦痛が 鬱積が...

今日を綴っているのに
嘆きが 蘇っては 何滴もの雫を 落とした

紙に滲んだ重さだけ 軽くなった気持ち

今日と 忘却したがっていた過去は
何処かで 繋がっているようだ...

消そうとしても ひそかに隠れていた傷

今となっては
私を育てた

愛すべき 痛み

情景句・虹

蒼天の 入道眩しき 夏過ぎぬ

Souten no

Nyuudou mabusiki

Natu-suginu

波飛沫 霧を射す虹 鮮やかに

Nami sibuki

Kiri o sasu niji

Azayakani

空広く 希望は無限と 虹が呼ぶ

Sora hiroku

Kibou-ha-mugen to

Niji ga yobu



ひこうき雲

白雲の 速きを目で追う ただ独り

句・猫ごはん

猫用缶 開けた匂いは 食欲そそる

食べた後 顔を洗って 明日は雨よ

お洒落だね 手を舐めた後 顔を拭く

指の間（ま）を もぐもぐかじる 丁寧に

まるい手は まんじゅうみたいに 柔らかい

耐え切れず ぱくりとその手に 食いつくと
じっと冷めた目 切ないね

いつもこれ 残った片手で 頬叩く
肉球パンチ 心、天国♪

雲心月性

眠れぬ夜は

巢食う夢が

錚々と胸を 乱す

月の灯火は

悔やむ時を

想々と影に 映す

手のひらから零れ落ち

広がるは 執着

拾わなくとも なお 夢へ還る

群れ成す雲端から零れ落つ

陽射しは 愛惜

忘れたくとも なお

現(うつつ)を鮮明に

刺す

殻

傷が嫌ならば 寡黙に。

封じた貝の殻は硬く

二度と開けないと 自分に誓う

それだけが信念

この蓋1つだけが救い

身を護ろうと

波は殻を削りゆく

さらさらと砂に打ち付ける

夜となく 昼となく

ざわめきは繰り返される

閉ざしたひとことを

置き去りにして

傷を 知っていても

きみが傷ついたこと

僕は 知っているけど

何もなかったかのように

こつこつと時を継続する君の横顔に

僕は 訊けないでいる

何も語らないまま

カーテンを閉ざしたきみを

僕は 気づかないように振舞うしかない

そしてきみも そんな僕に気づけない

ぴーまん

縦割りにして、余計なものを捨ててしまうんだ。

半分は食料に

半分は横にして、波に浮べる。

水平線を目指して、波に乗せるんだ。

脇目も振らずに

漂う心地に、笑いを浮べる。

陽と水の狭間。

煌めく海面の果ての一筋。

いつか あのー弦にふれられる。

きっと なめらかな音を奏でるだろう。

でも

たぶん

やがて....。

波任せの小船は

そのうち

沈む。

その時

ひと搔きを惜しんだ自分を

悔しがれたなら

恐らく私は

生きて いたんだ。

憧れに背を伸ばす

『 憧れは
彼方（かなた）の輝き
我も 照る 』



眠らない時間

いつもより遅い時間

瞼は重いのに 眠りたくない 夜

軽く 憂いに浸りたい

浮かぶ切なさに たゆとう

誰を 想うわけでもなく

ただ

私を 哀しみたい

雨雲

青空に 白いそふとな雲
甘そうだけど食べたらいけないの
あたしの喉を通ったら 苦くなる

胸に募った想いが 膨れ上がって

あたしは

泣かずにいられない

扉

好きでいて...

冷めたその瞳に

泣き声が届く日なんて来ないから

接吻も 体温すらも否定されるから

乞う時間を 探す時間へと

注ぎ 満たし 埋める

まずは

私を愛せ と

鏡

冷ややかな君が 嘲笑う

君を愛せることが

すべてへの 扉 なのだと

整頓

胸に刺さった鏡の欠片

アルバムに挿んだままの意地めっ子

さよなら

さようなら

もう、自分の弱さを憎んだりしない

射光

ようやく

微かだけれど 視線を上げられた

木目の床には 光で描かれた模様

だんだんと

僅かだけれど 周囲を見回せた

白いカーテンの眩しさに 慣れてゆく

織りを縫う 夏の声に

抗わずに 耳を澄まして

ゆっくりと、風の涼しさに肌をさらせる時を想う

うっすらと、レースに指をすべらせる日を感じる

私が

この手で

自分で

カーテンを

今は

その瞬間が待ち遠しい。

追い風

吹き過ぎてゆく風

胸に抱きとめた やさしい言葉の数々だけが 今は私に

瞳

閉じていたまぶたを開き 空を見上げる。

こころ締めつけていた思い出が

今は遠く

散り散りになって 空で輝いていた。

かどばらずにまるいところそのままを

無理にとおらないで おそくなってもいいんだよ

天秤にかけるものなんて さがさなくていい

あなたで

いいじゃない

なにも ない

はじめる

さなぎ

生まれ 変わる

過去を 溶かして

身の内を喜（き）に染め

固めていた像を 破りくぐり 置き去り

虚無の風 不実吹く空

時満ちるまで 彼方見ゆるまで

力まず 軽やかに

風に乗る 広く羽ばたく

降り注ぐ 花の香を織りなし

高く 遠く 陽射しに舞いて

新たな大気を 彩りゆく



『咲くを逸（はや）らず
それぞれに時（さだ）あり』

▼クリックが励みになります▼（1日一回有効）



アルファポリス
Webコンテンツ